

①算数 3桁÷2桁のわり算の筆算 (百の位が空位) 榎本

子どもがなぜ百の位が空位になるのかを説明し、書くことを目標にしている。折り紙の束を操作することを通して、100まとまりを10のまとまりに変換するイメージを作らせる。

→教科書に載っている折り紙のやり方を見て理解できない子もいる。付箋紙を用いて具体の操作をすると、分かりやすくなる。

☆なぜ中学年で学力差が大きくなるのか。⇒具体から抽象への転換ができないから。

保存概念が身についているか確かめることで、論理的思考力を測る。

算数は科学的概念。計算の仕方等はその時に初めて知ること。よって論理的思考の難しい子に習得を求めるのは厳しい。なぜできないかの根本を探ってやる。商の見当をつけられないなら、それをサポートできる教具を用意。

(国語は生活的概念。今までの生活の中で知っていることを使って学習していく。)

☆子どもの恥ずかしさはどこからきているのか?→「できない」「分からない」だけでない、根本をさぐる。

間違いが次のステップになるという思想を育てられているか?

⇒「分からへん」「どうする?」が学習の動機になる。⇒発見の喜び

②国語 「雀の子 そののけそののけ 御馬が通る」 解釈・実践報告

解釈をしながら、「授業をしている時にこんな考えが出たらどうするか」と展開の作戦を組むことが大切。

言葉の並び(雀の子→そののけそののけ→御馬が通る)に注目すると、一番言いたいことが見えてくる。

生田 『雀の子』で問題作り。雀の子は1匹?複数?

「変だ。おかしい」を強く感じさせないまま授業に入ってしまった。追及したいという思いを引き出せていなかった。

→授業の中身もだが、学習環境も大切。机の上に必要なものを出させない。退屈すると子どもはノートを書き出す。授業の最初が勝負。そこでどれだけ子どもをひきつけられているか。授業の初めの雰囲気によくなければ立て直しが必要。

展開については、子どもから出た問題に軽重をつけていく。すぐ解決できるところはスパッと。子どもが、イメージを深める意味のある問題を見出していけるようにする。また、子どもから出る問題に対する細かな戦略がないと手立てが打てないため、あらかじめ子どもが抱く疑問を知ってから授業に臨むことも必要。

濱田 雀の子と馬との距離はどのぐらい?

子どもたちから出た疑問を元にした展開でなく、教師主導で進めてしまっている。雀の子があと数秒で轢かれるというイメージを持たせるために馬との距離を考えさせたが、「そこ」の解釈が難しかった。

→「そこ」は、人と雀の子との距離が近い証拠には使えない。距離だけでは、状況を判断することができない。馬が迫ってくるスピードと距離が伴ってこそそのイメージ。

子どもたちは、反応はするものの、発言した子に対してではなく、教師に向けての反応になってしまっている。子ども同士の結びつきが弱い。また、どちらでもいいような立場で聞いている子がいるので、絶えず自分はその立場かを選択させるような言葉を教師が返していく必要がある。

長谷川 『御馬が通る』 新情報は「御馬」

1年生の子たちは、「そののけ」を「そのの毛」と読む子もいた。「そののけ」はあぶないから言っているのか邪魔だから言っているのかで対立を作って授業をしたが、子どものイメージの変化にはつながらなかった。

→子どもたちがイメージを具体的に描けない（「その毛」と読むレベル）のであるなら、「が」に注目して考えさせるというのはかなり高度。1文字ずつ追っての読みから、文節を意識した読みに変えていくような授業がこの場合は求められる。

③おむすびころりん 解釈 池村

音読の仕方を工夫させたい。おむすびが転がる様子「すつとんとん」等。「かけだした」「とびこんだ」に注目させることでそれができるか。

→何をねらって授業をするのかを明確に。読みを変えるにはイメージを作ることが前提。はっきりとイメージをつくれるところを選ぶ。「おむすびころりんすつとんとんころころりんすつとんとん」の歌は、3回ある中で歌のボリュームの変化が明確に分かる。声の大小や顔の表情、読む速さ等、たくさんの要素で表現する。